

# 乳幼児の探究心を育む保育環境

福田 奈美恵

社会福祉法人湘北福祉会 あゆのこ保育園 主任保育士

## はじめに

当園は厚木市にある認可保育所で、0歳から6歳児のお子さん140名をお預かりしている。ほとんどのおさんが0歳児、1歳児から入所し、小学校へ就学するまでの5～6年間を保育所で生活する。寝返りもできない赤ちゃんで入所した子どもが、元気に卒園式を迎える姿は、毎年の事ながら感慨深いものがある。

保育所保育指針の中には、「乳幼児期は、生涯にわたる生きる力の基礎が培われる時期」であると記されているが、子どもの育ちに継続して関われることは、保育所で保育をする者にとっての醍醐味であると同時に、「子ども達の生きる力の基礎を培う」大切な時期に子どもの育ちに関わる事への責任も感じている。

今回、「幼児期の探究」というテーマで保育を振り返る機会を頂いた。保育所保育指針の続きには次のように記されている。「・・・特に身体感覚を伴う多様な経験が積み重なることにより、豊かな感性とともに好奇心、探究心や思考力が養われる。また、それらがその後の生活や学びの基礎になる」(第2章 子どもの発達)

すなわち、1)「探究心は、多様な経験の

積み重なりで養われる」、2)「探究心は、その後の生活や学びの基礎になる」ということになる。上記の2つの視点から、保育所における乳幼児の探究心の育ちと、それを支える保育環境について、日々の保育実践の中から事例を取り上げつつ、考えを述べてみたい。

## 幼児期の探究を支える“多様な経験”

### 1. 0歳児からの経験の積み重ね

雨上がりに散歩に出かけると、門に通じる。スロープの手すりに雨の滴がいくつも連なっている。それを見つけた0歳児の子どもがバギーの中から手を伸ばし、指先で滴に触れる。滴は指先を伝って落ちる。「あ！あ！」と、子どもはその発見の喜びを保育士に伝えようとする。保育士は「あら、本当だ」「冷たいね」「いっぱいあるね、きれいね」「雨の滴だね」などと子どもの想いを受け止め、心地よいひと時を子どもと共有する。そして、子どもが発見した喜びにゆったりと関わることの大切さを理解し、なるべく十分な時間が取れるように保育士同士で声を掛け合う。保育士同士も「風が気持ちいいね」など意識的に会話をしながら、「トンボが飛んでいるね」「枯れ葉がいっぱいだね」など、子どもが季節を感じたり、身近な自然に親しみを感じたりできるような言葉をかける。

また園内にも自然に出会う機会はたくさんある。特に人気なのは、身近にいる虫などの小動物だ。1歳児になるとスロープやテラスなどにアリを見つけ、トコトコと追いかける。「アリさん、歩いているね。どこに行くのかなあ」などと言葉をかけながら、保育士も一緒に追いかける。

2歳児は、ダンゴムシを探るのが大好きだ。子どもは、植物用のプランターの下にダンゴムシがたくさんいることを知っている。クラスの前に置かれているプランターを力いっぱい動かしては、「あーっ！いたーっ！」と大喜びし、保育士や友達に教えに来る。保育士は「ほんとだ。見つけるの上手だね」などと子どもと一緒に発見を喜び、手のひらに乗せて見せたりする。他児と共に「ダンゴムシ、硬いね」「見て、丸まった！」「くすぐったい」など、見たことや感じたことをたくさん伝え合う。

このように身近な環境の中で、じっくりと“もの”や“こと”に関わる時間を保障すること、保育士自身も子どもの気持ちに添って一緒に喜びや楽しみを共有することで、子どもは安心し、「もっと知りたい、もっと発見したい、もっと伝えたい！」という意欲が更に芽生え、積極的に様々なもの・ことに興味・関心のアンテナを伸ばしていく。

何気ない日常の保育の一コマであるが、特に乳児期の子どもにとって、このような時間を保育士ととともに心ゆくまで楽しむ、という経験の積み重ねがその後の探究心に結びついてくることを、保育士としてより一層心にとめる必要がある。

## 2. 多様な経験との出会いの場

当園は、地域的にも恵まれている。園の周囲には田んぼや畑が広がり、遠い山の頂<sup>いただ</sup>や移りゆく雲の形をゆったりと観て楽しむこともできる。また、保育士間で“お散歩マップ”を作成し、「この時期に、この場所に行くと、こんな草花に出会えるよ」「この時期に、この畑で、こんな作物が育っているよ」「どんぐりは〇〇の近くで拾えるよ」などの情報が共有できるようになっており、散歩先選びに活用されている。子どもは小さな頃から身近な地域の自然に親しみ、四季を感じながら育つことができる。

また、園庭にも子どもが季節を感じられるような工夫がある。「四季を感じられるように」「見るだけでなく、足を踏み入れ、匂いをかぎ、触れ、味わうなど五感を使って楽しめるように」「自由に摘めて、遊びを創りだせるように」など、保育士等の思いから少しずつ工夫を重ね、園庭の奥に現在のような「ガーデン」が整いつつある。キンモクセイ、ドングリ<sup>どんぐり</sup>の木、菜の花、数珠玉<sup>じしゆ</sup>、イチジク、キウイ、コスモス、フウセンカズラ、ブラックベリーやオシロイバナ、ホウセンカ、様々な香りのハーブもある。

地域の方が分けてくださったり、保育士が自宅の庭から株分けしてきたりと、種類もだいぶ充実し、保育士や子ども達の癒しの場にもなっている。「これ、何？数珠玉？取っていいの？」「すごい！これ（フウセンカズラ）割ったら、ハートの種が出てきた！」「え？じゃあ集めようよ！」「先生、種、埋めてきた（自分の決めた場所）。また芽が出て来るかなあ」など新たな発見や驚きをワクワクしながら楽しんでいる様子だ。また、「先

生、種をまくの？僕がやりたい」「先生、草むしりしているの？私も手伝う」など、自ら積極的に植物に関わろうとする姿も見られる。夏の終わりの草むしりの後、枯れ草を山のように積んでおいたところ、トカゲや虫たちの格好の隠れ家になっているのを男児が見つけ出し、皆で群がる姿があった。虫などの小動物がどこに隠れているのかを今までの経験から見出し、また、その情報が他の子どもや年下のクラスの子どものにも自然と伝わっているようだ。

### 3. 経験の積み重ねから、更なる「関わり」の意欲へ

そのような経験を積み重ねながら、子どもは更に興味の対象を広げていく。園舎前の側溝でザリガニが取れるらしい。「ザリガニ捕まえてきたよ」と、登園時に園に持って来る。「お部屋（保育室）で飼いたいな」「でも、何を食べるの？」「食べるものが無いと死んじゃうよ」「何に入れて飼うの？」など、友達と一緒に図鑑を開いたり、家の人や保育士に聞いたりしながら関わろうとする。それを見ていた他の子どもが「もう1匹いたよ！」とザリガニを連れて来ることもある。保育士は、子どもの想いを大切に受けとめ、できる限り子ども主体でザリガニの飼育に取り組めるように手や口を出し過ぎない配慮をする。同時に子どもが図鑑を開きたい時に開ける様準備したり、「先生、ザリガニ動かないよ。大丈夫かなあ」と子どもが心配になった時に一緒に心配したり調べたり、「先生、ザリガニ元気だよ！ハサミ上げてる！」と子どもが喜んでいる時には一緒に喜んだりしながら子どもと生き物との関わりを支える。また、時

には保育士がそっと「ザリガニのお水、汚くなっちゃったなあ…」とつぶやいて子どもに気付かせたり、「日光に当たりすぎると良くないかもね。日陰の部分も必要だね」と助言したりもする。それにより、子どもはザリガニに親しみを持つと共に生命を意識し、自分達が世話をすることでザリガニが快適に生き続けることを実感する。

### 4. 探究心が、その後の生活や学びを作り出す

#### ～子ども主体の保育へ

事例1：アゲハチョウを育てる。どうせなら、飼育ケースなしで！

今年度の4歳児クラスは、特に虫が好きな子どもが多い。担任は、子どもの虫への関心の高さを活かして、保育室内の「生き物観察コーナー」のスペースを例年に比べ、広めに設定している。

そんな子どもの「虫を育てたい！」という想いから、春から夏にかけてのアゲハチョウの飼育は始まった。きっかけは、園庭のフェンスにくっついてたテントウムシの幼虫を子どもが見つけたことだった。「これ、何？幼虫だよ」「何の幼虫だろう？」と、興味を持った子どもが図鑑で調べると、テントウムシだということがわかった。それから、園庭や散歩で幼虫を探すなど、子どもの幼虫に対する興味が継続していたので、保育士は「子ども達に幼虫の生長を間近で観てもらい、生命の不思議さを更に感じてもらいたい」という想いを持った。そして他の職員に「もし、自宅などにチョウの卵や幼虫のいる木があったら、分けて」と声をかけたところ、アゲハチョウの幼虫のついたミカンの枝を分けても

らうことができた。職員間でも「あのクラスは、虫が好き」との認識があり、快く協力してくれた。

保育士が子ども達に小さな幼虫を見せると、「お部屋で育ててみたい！」と子どもの顔が輝いた。保育士は他園から学んだ「飼育ケースなし」のスタイルに挑戦してみた。どうせなら、ケースがない方が、いろいろな角度から見えて、子ども達もより観察しやすいのではないかと考えたからである。タライの中に空き瓶を立て、そこに幼虫のいるミカンの木を挿した。虫が苦手な子どもも他児の肩越しに、そっと覗いている。葉っぱの裏もよく見えるので、小さな幼虫も発見することができた。「アゲハチョウになるんだよね」「そーっとだよ、動かしたら死んじゃうよ」「ほら、葉っぱ、食べてるよ！」同じ保育室に“棲んでいる”という感覚になったのか、愛着もより一層強くなった様だった。幼虫には“トーマス”“さくら”“キューフォーチュン”という名前が付けられた。小さな幼虫が少しずつ葉を食べて大きくなっていく姿などを、子どもたちは廊下の「みつけたよの木」（模造紙に木をかいたもの）に葉っぱの形をしたメモで貼り付けていった。「もう、あんまり食べないねえ」と、幼虫が葉を食べなくなるとサナギになることも知っている。果たして羽化するのだろうか…と不安と期待でいっぱいだった子ども達と保育士だったが、ある朝、保育室で羽化した1匹のアゲハチョウを発見した。「うわーっ！アゲハチョウになってるーっ！」「ねえ、見てみて！」と、他のクラス、廊下を通る保育士達、送迎の保護者の方など、たくさんの人達に感動を伝える姿があった。命の不思議さや美しさを近くで感じた

喜びや、自分達がやりたかったことを実現できた満足感からか、子ども達の目はキラキラしていた。

## 事例2：ワクワクは伝染する？ どんぐりより、中の虫？

その4歳児クラスが、この秋は「ゾウムシを育てる」と動き出した。散歩でどんぐり拾いをした際に、虫に詳しい子どもが「どんぐりの中には、幼虫がいるんだ」と発した一言から、「何の虫になる幼虫なの？」「コガネムシだよ」「え、違うよ」など会話が広がった。保育士と子どもが図鑑で調べたり、子どもがお家の人に聞いて来たり、インターネットで調べたりしたところ「ゾウムシの幼虫らしい」ということになった。本当に、どんぐりからゾウムシが育つか…半信半疑ながらも、子どもと担任と一緒に腐葉土や枯葉などを使って「ゾウムシが育つ環境」を作ってどんぐりを設置し、保育室内の“観察コーナー”に置くことになった。今の所、特に動きは無いが、子どもは毎日の観察を怠らない。保護者の方からも、「家でも、容器にどんぐりを入れて、ゾウムシ（が育つか）やり始めたんですよ」という声が聞かれるようになり、「ゾウムシ育て」は家庭にまで広がった。

一連の実践の中で、子どもが「これをやってみたい」「こうするとどうなるのだろうか？」などの想いを抱くと、保育士は、その想いをくみ取り、環境を用意したり、一緒に調べたり共感したりしながら、どう発展していくのか予想や見通しを立て、更にワクワクするようなしなかけを工夫し、子どもを支えてきた。その経験の積み重ねにより、子どもの中には、「ここ（保育室・担任）では、やってみたい

ことを自由に伝えてもいいんだ」「そのやりたいことはきっと実現できる」という安心感や確信が育まれたのではないかと考える。主体的に“もの”や“こと”に関わろうとする意欲と、それを支える保育環境、そして家庭とのつながりが、子どもの探究心を高め、真の学びへと導いていくことを実感した事例であった。

### 幼児期の探求を支える“保育環境”

子どもの探究心は、“やってみたいこと”を安心して試せたり、または、実現できるように支えられたりする環境の中で育まれていく。保育環境の中には、保育材、環境構成の配慮など、さまざまな要素があるが、ここでは、人的環境としての保育士の関わりや、子どもの生活の連続性を保障する家庭との連携の視点から考えてみる。

#### 1. 子どもの「やってみたい」を実現する、保育士の感性を磨くために

～職員研修の工夫～

保育士には、子どもの「なぜだろう?」「不思議だな」などの発見や疑問・感動に対して一緒に面白がったり、不思議がったり、感動したりする感性が求められる。子どもと保育士のワクワク感がまさに化学反応を起こした時、子どもの興味がぐんと広がったり、深まったりするように思う。そのためにも、保育士の感性を磨く場が必要である。

当園では、職員研修の時間を使い、保育士同士で語り合える場を作れるよう工夫している。例えば、一人一人の保育士が、自分のクラス以外の環境について「いいね!」と感じた場所や場面を写真に撮り、持ち寄る。研修

では4～5名のグループに分かれ、そこで写真を見ながら「どこが良いと感じたのか」を語り合う。同じグループの中に新人も経験者も入る。それぞれの違った視点が互いの学びになる。また、保育士の中から、「このコーナーの遊びがなかなか発展しない」などの悩みが語られると、「子どもの発達に合っているか」「違う素材を用意したら、うまくいった事がある」など、グループで意見交換をしながらアイデアを提供しあうこともできる。

各クラスが20分程度の事例発表を行い、実践を共有することもある。「自分のクラスの子ども達が何に出会って、どんな風に興味を持ち、どんな風に発展して、どんな学びを得たのか」を、プロジェクターを使用して報告する。写真を大きめに表示することで、事例が視覚的にも理解しやすく、子ども達の表情なども分かりやすい。発表後の語り合いの間では、「こんなふうには発展させてもいいかもね」「たとえば、こんな絵本を使ってみたら?」など、「明日の保育へのヒント」という収穫も得られるようだ。また、0歳児から5歳児までのクラスの報告を共有することで、育ちのつながりを意識した上で、今自分が担当する子どもの育ちにふさわしい環境を、見通しを持って工夫することができる。更には、このような語り合いの研修を重ねることにより、子どもの育ちを支える保育士が、その役割の大切さに気づき、園として何を大切に実践を積み重ねていくのか等、同じ方向を向いて実践を行うことにも繋がっているように感じる。

#### 2. 家庭とつながる、家庭へつなげる

4歳児クラスのアゲハチョウの実践では、

廊下の掲示（みつけたよの木）で、日々の幼虫の育ちを保護者に伝えていった。他のクラスの保護者の方も掲示を見て興味関心を持ってくださり、羽化したときは、子ども達と一緒にになって喜んでくださった。

このように、当園では、各クラスの前の廊下を使って、保護者向けの掲示を作成している。子どもの探究心を育む為には、保護者の方に保育の意図を理解して頂くことが大切だが、そのための手段の一つとして掲示を活用している。

活動内容が伝わりやすいよう写真を使うが、写真と共に「こんなねらいをもって、この活動を行いました」「保育士はこのような点を工夫し、配慮しました」「こんな育ちが見えました」などのコメントを入れ、今経験している活動がどのような学びに繋がるのかを分かりやすく伝えられるよう、工夫している。

保護者はお迎え時などに掲示を見て「こんなことをしているんですね」と保育士と語ったり、子どもと一緒に掲示を見ながら会話したりするなど、掲示は保護者・子ども・保育士をつなぐきっかけにもなっている。子どもにとって、園での出来事をご家族に話し、ご家族の方がその話に興味・関心を持って耳を傾けてくれることは大変な喜びとなる。さらにその話の中で子どもが更なる知識を得、興味を感じ、「明日保育園に行ったら友達に教えてあげよう」などと生活がつながっていくことは、子どもの探究心を育てるためにとっても大事なことではないだろうか。

### まとめ

日々の保育実践を振り返り、あらためて「探究心とは自らの想いから湧き出るもの」

であること、「それを育む為には乳幼児期からの多様な経験の積み重ねや多様な環境との出会いの場が必要である」ことを確認することができた。

また、「乳幼児期に心動かされる経験を積んだ子ども達は、安心できる環境の中で、やってみたい“もの”や“こと”を意欲的に見つけ、過去の経験や学びを活かしながら主体的に関わろうとする」という姿も事例の中で確認することができた。そして、そのために保育士自身が感性を磨き、保育士同士の語り合いを通して、子どもにとってのよりよい保育環境を工夫することが大切であることを再認識することができた。更には、子どもの生活が分断されないよう、園と家庭とをつなぐ工夫が大切であり、それが子ども達の探究心の育ちを保障することにつながっていることも振り返ることができた。

先程の事例で紹介した4歳児クラスの子ども達は、分からないこと、知りたいことがあると、図鑑を利用したり、大人に聞いたりなど、何とかしてその答えを得ようと試行錯誤する。その試行錯誤こそが探究であり、その姿を温かく見守ることが子どもの探究心の育ちを支えることにつながっているのではないだろうか。「探究心は、その後の生活や学びの基礎になる（保育所保育指針）」のである。それは「人」としての基礎となり、生きる力につながっている。乳幼児期から子どもに関わる私達保育士の責任の大きさをあらためて実感するとともに、子どもの「何だろう?」「不思議だな」「やってみたい」等を引き出せるような保育実践を意識し、今後も努力や工夫を重ねていきたいと思う。

## 研究紀要第45号 (平成27年度)

---

平成28年 3月31日発行

編 集／公益財団法人 日本教材文化研究財団

発行人／新免利也 (専務理事)

発行所／公益財団法人 日本教材文化研究財団

〒162-0841 東京都新宿区払方町14番地1

☎03(5225)0255 FAX 03(5225)0256

<http://www.jfecr.or.jp>

---

ISSN 0288-0245

印刷 (株)天理時報社